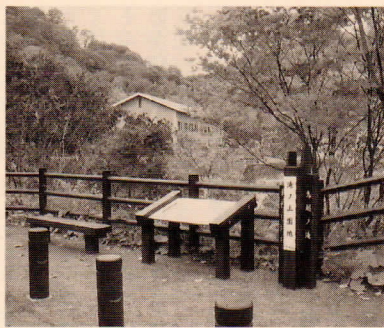


紅葉の滝ノ上温泉

秋です。岩手県平石町の小岩井農場を経て滝ノ上温泉を訪れました。平石川支流の葛根田川を上って行くと奇岩玄武洞を見ながら間もなく温泉に到着。鳥越ノ滝展望台から見る紅葉の深谷は圧巻です。すぐ上流には地熱発電所があり、もうもうとした蒸気が青空に噴き上がり、巨大な地下エネルギーが感じられます。ひなびた温泉宿が二件ほどあり、ゆつたり湯に浸かれます。盛岡からも近くお薦めの温泉。ただし、冬期間は休業とのことです。(Y)



詩と音楽と珈琲の店
「ぼくらの理由」通信

CHaG

2012・11(秋号) NO. 47

生誕85周年

『動物哀歌』の詩人 村上昭夫

朗読会とフォーラムを終えて

市民の歴史探究館・参予 仲村重明

郷土岩手盛岡の詩人・村上昭夫は昭和四十二年病没(享年四十一歳)です。日本現代詩歌文学館の「没後三十年村上昭夫『動物哀歌』への道」開催以来途絶えていた頭

彰普及事業が、去る十月十三日に「生誕八十五周年記念『こころぎ忌』として継承開催されました。第一部は実弟の村上成夫氏による朗読会であり、第二部は岩手高

* 1927年岩手県生まれの詩人村上昭夫は苦しい闘病生活のなかで詩を書きつづけ41年の生涯を閉じた。上の写真は盛岡市立図書館構内にある詩碑。詩集『動物哀歌』のなかの「私をうらざるな」が刻まれている。

夜を見はつているつながれた犬たち
私に向って吠えるな
私が誰なのかを知らないうちに
吠えることはできないだろうに

おびえる風のなかの雀たち
私の行先から舞い立つな
私が何を聞きたいのかを知らないうちに
舞い立つ必要はあるまいに

地からはい出た痛ましい虫たち
暗い穴のなかに隠れてゆくな
私が何を捜しているのかを知らないうちに
隠れる必要はあるまいに

冷めたい水のなかの魚たち
私の足音が近づいたらと
わびしく散り去ってゆくな
私が何処へ行くのかを知らないうちに
散りさることはできないだろうに

私はそれを聞きにゆくのだ
私はそれを捜しているのだ
私は其処へ行くこととするのだから
どうか私をうらざるな

(30歳時の作「私をうらざるな」詩碑より)

校卒業生の高橋克彦氏を実行委員長とコーディネーターとしたフォーラムです。

パネラーには昭夫ゆかりの方々(岡澤敏男・斉藤彰吾・北畑光男・城戸朱理の各氏)にボランティアでお願いました。

これは、昭夫命日の十月十一日の振り替え実施となりましたが、本来は今年中を「昭夫生誕八十五周年イヤー」として顕彰運動をしようとの、民間人有志での取り組みであったため、今年限りの名称として命日祭をちなみに「こころぎ忌」とし、没後四十四周年と一月五日の生誕日の繰り延べ祝祭を併せ、統合祭事として行つたわけです。大成祭だったと思います。

今回の催事の最大の苦労は、一般市民の祭事として提供することでした。つまり、一部の研究者の勉強学習会や、単なるファンと追悼集いなどに限定しない工夫と努力です。告知のチラシやポスターも、有名人・著名人など関係者配布や内部者動員といった狭い範囲に安易に依拠せず、また大規模公共施設の集客力に依存せず、むしろ市民生活現場の地域公民館への配布依頼を徹底するなど十分配慮したことです。いわゆるゲスト席への召還も差し控えました。

なぜなら、なによりも昭夫は庶民の詩人だったからです。

一市民として詩を書き、郷土盛岡の地で他界した、親しく地元の大衆に愛されるべき先人詩人の一人であったことに尽きます。

村上昭夫顕彰の今後ですが、やがて六年後に来る没後五十周年や、十五年後の生誕百年記念での祭事を見据えて、今から準備していきたいと考えているところです。